

PDF issue: 2025-05-10

#### 朝鮮戦争と戦後批評の屈折 : 『現代文学』と日野啓 三・大岡信・金太中

#### 梶尾, 文武

(Citation)

國文論叢,60:45-62

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

https://doi.org/10.24546/0100483035

(URL)

https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483035



# 朝鮮戦争と戦後批評の屈折

# ―― 『現代文学』と日野啓三・大岡信・金太中 -

## 梶 尾 文 武

## 1 戦後文学から現代文学へ

一九四六年一月、荒正人・埴谷雄高・平野謙・本多秋五・佐々一九四六年一月、荒正人・埴谷雄高・平野謙・本多秋五・佐々であろう」と述べるが、『近代文学』派は、一九三〇年代に体験した革命運動からの「転向」を文学上の主題とし、政治的イデオロた革命運動からの「転向」を文学上の主題とし、政治的イデオロた革命運動からの「転向」を文学上の主題とし、政治的イデオロと文学」という枠組を戦後批評の場に設定した。

に属する。そのうち批評家の三者は、『近代文学』派に続く戦後批本誌を青年期に読み、その絶大な影響下で自己形成を遂げた世代太郎が参加している。奥野が「『近代文学』は僕らの成長期にかかわりあっている」と語ったように、招かれた四人は、創刊当初の太郎が参加している。奥野が「『近代文学』は僕らの成長期にかか罪」と題する座談会を開催した。埴谷がオブザーバーを務め、小罪」と題する座談会を開催した。埴谷がオブザーバーを務め、小罪」と題する座談会を開催した。埴谷がオブザーバーを務め、小罪」と題する座談会を開催した。

評第二世代を代表する存在である。

頃、 書として『近代文学』派の批評言説を受容したことを窺わせる。 記』、西田幾多郎『善の研究』といった書物の読書体験と重ねもし にとっての倉田百三『愛と認識との出発』、阿部次郎『三太郎の日 る。奥野は続けて、自己の世代の『近代文学』体験を、上の世代 「人生論、人間いかに生くべきかという観点から読んだ」と述べ を中心とする批評家たちの文章を読んだ」と言い、日沼倫太郎も として切実な今日の問題が論じられている書として『近代文学 知って驚いた」と回想すると、奥野健男は「新しい自己形成の書 とも異なる「新しい立場、新しい次元がありうるのではないかと いう問題のたて方」に、ドイツ観念論ともマルクス主義的唯物論 読んだかについて語った。日野が「『近代文学』派の政治と文学と 養主義の代替として、つまりは哲学と文学とを架橋する人生論の ている。これらの発言は、 ここではとくに、 彼らはこの座談会において、青春時代に『近代文学』をいかに 自己探究というか自己表現というか、その方法として古い意 日野啓三に注目したい。 戦後の文学青年が、大正期における教 日野は、「僕自身その

と語っている。奥野もこの発言を受けて、「荒正人のモチーフを正 戦後青年の「いかに生くべきか」という問いにもっともよく答え あるが、かならずしも作品月旦ではない。人生いかに生くべきか かねてより「わたくしがもとめてゐる批評は人生と現実の批評で 統に引きついだのは日野君だった」と証言する。実際、荒正人は ものが、その両方を含む表現の方法として大へん示唆的だった. 味での哲学とそれから文学というもの、その両方のあい わせれば、その正嫡として登場した批評家が日野啓三であった。 ることのできた『近代文学』の批評家は荒正人であり、 の探究こそが批評の課題である」と語っていた。日野によれば ていた。そこに『近代文学』の評論、とくに荒さんの評論という 日野と奥野は、同人誌 『現代評論』(全二号、 54 6 だで困 12) で活 奥野に言

0

ば知識人の共同戦線の最大公約数的目標を設定しようという意図 背景として創刊されたんだが、その創刊号の巻頭論文としてい 村松剛・遠藤周作といった文芸批評家、さらには大岡信・飯島耕 0 が 日本の再軍備が始まるという危機感と一種の人民戦線的な空気を の間にひろまった新しい危機感、 代評論』(一九五四年) 評家たちを糾合した、戦後批評第二世代の出現を画する雑誌であ 一・東野芳明といったシュルレアリスムに傾倒する詩人や美術批 姿勢と通ずるものがあったように思います」。 強かった。としてその姿勢はたしかに敗戦直 右の座談会では、日野は次のように当時を回想している。「『現 は、 朝鮮動乱を契機としてわれわれの世代 戦後の蜜月時代はもう終った、 一後の 近代文学

夏、

朝鮮戦争のぼっぱつしたときであった」と再説してい

は、そうした時代への危機感を背景に、『近代文学』に次ぐ知識 は終っていた、と日野は認識しているのだ。 米ソの協調による世界平和が破綻したとき、すでに日本の「戦後 年のことである。 告げた出来事として捉えられている点である。経済企画庁発表の 「経済白書」が「もはや戦後ではない」と宣言したのは、一 て検討する。ここで興味深いのは、朝鮮動乱が 人民戦線を新たに結成するという企図をもって刊行された。 しかるに、一九五〇年夏に朝鮮戦争が 五四年の |戦後| に終りを 『現代評論 始まり 一九五六

いた。 終ったのだ」と書き、「平和の幻想の破れたのは、 いう言い方に反対したい。「戦後」 て五六年に著した一文では、 か、というひそかな期待を抱かせもした」と荒は述べている。下っ に達した年」と見立て、「これから現代文学が始まるのではない なる目的を掲げ、手段をえらばずに争ふやうになつたとき、 戦争」の危機として受け止めた荒は、「ふたつの世界がたがひに善 ふであらう」と書いた。同年末にはこの一年を「戦後文学の終焉 つの世界の土台である人類は急速に滅亡の淵に吸ひこまれてしま 荒正人は、右のような時代認識を一九五〇年の段階で先取 朝鮮動乱の勃発を、 原子爆弾の行使も辞さぬ 荒は「もはや「戦後」ではない、と はすでに昭和二十五年の夏に 昭和廿五年 「第三次の大

動をともにした一時期を持つ。両者の他に、吉本隆明・服部

を構想した後続世代随一の批評家であった。日野が荒に感化され だったに違いない。日野こそが、荒に提起された朝鮮戦争の時代 者二世であり、 危機意識を最も深く共有し、 日野啓三は、 半島が戦火に包まれたことの危機感は人一倍深刻 京城で敗戦を迎えたのちに引揚げを経験した植民 戦後文学の終焉以後の

野が

『現代評論』創刊号に掲載した巻頭論文については、

追っ

名は単刀直入に『現代文学』(全丘号、11・3~22・7)という。 古一年春、日野は同じ大学の文学仲間と同人誌を刊行した。 誌のは正しくない。追って検証するように、日野の批評における転のは正しくない。追って検証するように、日野の批評における転のは正しくない。追って検証するように、日野の批評における転のは正しくない。追って検証するように、日野の批評における転のは、遡って一九四七年、旧制一高の二年生の頃に彼の講演をたのは、遡って一九四七年、旧制一高の二年生の頃に彼の講演を

子や、 名は単刀直入に『現代文学』(全五号、51・3~52・7)という。 い。その作業は、一九五〇年代の日本の文学に生じた政治との関 彼らが同時代に抱いていた危機意識のありかたについて考察した の三人の同人、日野啓三・大岡信・金太中の文学的営為に着目し 代文学』である。本稿では、 ろまった新しい危機感」をリアルタイムで伝え、のちの『現代評 日野のいわゆる「朝鮮動乱を契機としてわれわれの世代の間にひ 野洋)、金子鉄麿、和田誠一の六名である。 住井すゑの娘犬田れい 創刊時の同人は日野のほかに、大岡信、 五一年春、日野は同じ大学の文学仲間と同人誌を刊行した。誌 在日の詩人である金太中らがのちに参加した。私見では、 刊の求心力となった小雑誌のひとつが、この謄写版の すなわち戦後転向の帰趨に光を当てることになろう。 朝鮮戦争の時代における『現代文学 山本思外里、 丸山一郎 現 佐佐

# 2 現代文学の条件――日野啓三

んだかぎりでは必ずしも綿密な論理家ではないが、文学者として年に登場した新人批評家を紹介するなかで「日野はわたくしの読7)に掲載した「現代文学とは何か」である。加藤周一は、五一日野啓三の出世作となった評論は、『現代文学』第二号(51・

と説明した」と評価している。学が必要とされるかという理由をや、抽象的に、しかしはつきり学が必要とされるかという理由をや、抽象的に、しかしはつきり学』掲載論文を「現代が「政治的季節」であるにも拘らずなぜ文の現実感覚は具えているように思われる」と述べ、この『現代文の現実感覚は具えているように思われる」と述べ、この『現代文

正を強めていた。 正を強めていた。 正を強めていた。

的 義の矛盾に眼をふさぐこと」も、 うに論じた日野は、 リニズムに反撥する旧式のヒューマニズムは無効である。このよ を選ばぬ」ものであり、その前では手段の正しさに固執してスター 0 命が志向された時代とは異なり、 和主義としての「戦後」は、一九五〇年をもって終った。平和革 13 0 !な立場を表現するのが「現代文学」にほかならない。 う、 ために流血と強制労働を正当化すること」もともに拒否すると 流血を伴わずにはいない。現代の政治とは「目的のために手段 否定性への徹底を説く。日野に言わせれば、その自己分裂 手段を選んで「流血拒否の名において資本主 目的を優先し「経済的貧困除去 朝鮮動乱以後、政治は世界規模

当時の日野の認識によれば、米国占領下における日本の一

玉

願うヒューマニズムの文学なのである。 現代文学はみずからの不在証明によってその存在を証明するリまして信ずることのできる、正しく現代の裸形を直視するリこの無用を誰よりも知っているが故に、自己の必要を誰にも この無用を誰よりも知っているが故に、自己の必要を誰にも 現代文学はみずからの不在証明によってその存在を証明する、

逆説的にも「現代ほど文学の必要とされる時代は之までもなかっ代ほど文学について語ることの無意味な時代はない」と述べつつ、新しい「ヒューマニズム」を見出そうとする。かくて日野は、「現する、否定的な、現実には不可能であるがゆえの虚構上の立場に、コスムと呼ぶことを拒み、むしろ手段と目的の矛盾のなかで分裂ニズムと呼ぶことを拒み、むしろ手段と目的の矛盾のなかで分裂日野はここで、手段に囚われて現状追認に陥る立場をヒューマ日野はここで、手段に囚われて現状追認に陥る立場をヒューマ

たし、恐らく之からもあるまい」と主張した。

同様の理路は

「第二の青春」(『近代文学』46・2)にも認めら

「目的と手段」

0)

匿名の著者は、

右のような問題意識

0

ブロレタリア文学の評価から出発して、コムミュ

定」(『新生活』46・4-5)に始まる。平野に加勢した荒は「文本大学』陣営との「政治と文学」論争である。この論争は、平野本文学』陣営との「政治と文学」論争である。この論争は、平野謙がかつての共産党におけるハウスキーパー問題や岡田嘉子のソ謙がかつての共産党におけるハウスキーパー問題や岡田嘉子のソ謙がかつての共産党におけるハウスキーパー問題や岡田嘉子のソ神なといふ点に政治の特徴がある」と述べた一文「ひとつの反措」といいて論議が交はに近い、「教生だは乖離について論議が交はに、「新生活」46・4-5)に始まる。平野に加勢した荒は「文化などといった。

小市民インテリゲンチャはたたかはなくてはならぬ」と説いた。小市民インテリゲンチャはたたかはなくてはならぬ」と説いた。でのことを階級闘争の名分のもとに是認するところに、小林の、そのことを階級闘争の名分のもとに是認するところに、小林の、でのことを階級闘争の名分のもとに是認するところに、小林の、でのことを階級闘争の名分のもとに是認するところに、小林の、でのことを階級闘争の名分のもとに是認するところに、小林の、社になることだ、と合理化されてしまふ」ところ、つまり女性の性になること」に着目し、それが「階級の犠牲になること」に着目し、それが「階級の犠牲になること」に着目し、それが「階級の犠牲になること」に着目し、それが「階級の犠牲になること」に着目し、それが「階級の犠牲になること」に着目し、それが「階級の犠牲になること」に

「党生活者」を論じている。荒はここで、作中の女性が「個人生活学的人間像」(『近代文学』47・3)において、小林多喜二の小説

間的である。荒を筆頭に『近代文学』が打ち出したのは、政治の間、である。荒を筆頭に『近代文学』が打ち出したのは、政治のは、個人の卑小な生に目を向けようとしなかった点でむしろ非人を、そしてそれを通してのみ、ヒューマニズムを見ようとする」との必要を説く。荒に言わせれば、革命運動のヒューマニズムを、そこで荒は、「ヒューマニズム」の理想を掲げた左翼運動がれる。そこで荒は、「ヒューマニズム」の理想を掲げた左翼運動が

うパラダイムは、政治の優位性に抗う文学の自律性、ひいては個 ことが社会の解放と進歩につながらなければならない」というも ここに敗戦直後の青年層が共鳴した所以があろう。 人の自由をあくまでも擁護する構えの下に成り立っている。 のだったと振り返る。『近代文学』が提供した「政治と文学」とい 非人間性に個人の生を対置する文学的自由主義の立場であった。 を殺すことで社会変革をするというのは間違いだ、自分を生かす 四七年に聴いた荒の講演に触れ、そこで得たメッセージは「自分 後年日野は

文学の自律性は現実には不可能な虚構としてしかありえない。流 とも日野は述べるが、政治の優位性がもはや疑いえないとすれば、 とを見抜いている。 求めるというアポリアを虚構として表現すること、 位性に抗いうるような文学の自律性はもはや現実的には不可能で 血を不可避とする政治的現実を直視しつつ流血を拒否する変革を にとることによって、逆説的虚構という立場の実在が可能となる ある、と日野は見ているのである。「現代の背理を背理として逆手 た」という認識である。戦争と革命の時代にあっては、政治の優 の「政治と文学」という認識枠組が、ひとつの屈折を経験したこ - 目的のために手段をえらんでいられる余裕ある幸福な時代は終 の日野はそれを「現代文学」の使命に数えたのである。 日野の評論「現代文学とは何か」は、戦後批評を差し貫く如上 日野が語ったのは、荒の認識とは対照的に、 朝鮮戦争の時

#### 3 危機意識の消失

るいは「虚点」と呼んだ。日野にその言葉とイメージとを与えた このような現代文学のアポリアを、 日野啓三は 「台風の眼 あ

0

据え、 唆を与えたのは、主人公木垣の次のような言葉であった。 動的な某新聞社に勤める小説家志望のジャーナリストを主人公に 荒れる台風のような「現代」と対峙する作品として評価した。反 場の孤独」(『中央公論文芸特集』51・9)に注目し、これを吹き ということ」(『近代文学』51・12) では、日野は堀田 0 が、 朝鮮動乱の時代の国際情勢を描いた作品である。日野に示 堀田善衛の小説にほかならない。「堀田善衛論 日の近作 台風 広 0

見極めうるのではないか。 ひきだしてみれば、 無を、外側の現実の風を描くことによつてはつきりとさせる 台風を台風として成立させている、 ――こうしておれの存在の中心にあるらしい虚点を現実の中に おれは生身の存在たるおれを一層正確 台風の中心にある眼 0 虚

かくて日野は、彼自身が語ってきた「現代文学」の理念を体現す かな具体を通して、巨大な抽象を見究め、 悲劇化した世界の焦点、東京」を舞台に「この貧しい国のさ、や 日野は、 規定する、そして現代小説は之以外にはありえない」。こう論じた 描くこと」ができると主張する。「作家の精神を真空または虚無と 身がまず「眼の虚無」と化すことではじめて「外側の現実の風を 存在」を見つめようとする。日野はこの論理を裏返し、 よっておのれの「眼の虚無」を浮き立たせ、自分という「生身の 生活の底に投影してみせる技術」を獲得しえたことを称賛する 小説を書くことを望む木垣は、「外側の現実の風を描くこと」 堀田がこの作品で「朝鮮動乱とともに急激にその意味を 歴史の渦巻きを、 おのれ 自

評的立場をこの作品に記された「虚点」に重ねた。 る小説家の出現として堀田善衛の登場を受け止め、 みずからの 批

位置づける精神の異常な緊張自体」である、と日野は書く。 ち荒が批評上の拠点としたのは、「謂わばこの二つの地点の中間を 評文である。日野はまず、荒の特異な立場を、「政治至上主義」と は、荒の影響下から出発した日野が、自己の立場を再確認した批(2) なす全く別の地点、その虚構的 imaginary な地点に意志的に自らを した。「虚点という地点について―― のように読売新聞社に入社し、 非政治的文学精神」の双方を拒み、手段(出発点)と目的 のいずれかを絶対とすることを斥けるところに見る。すなわ 九五二年、日野はあたかも「広場の孤独」の主人公に倣うか 会社勤めの傍らで批評活動を継続 -荒正人論」(『文学界』 52 (到達 . 12

日野の見立てによれば、荒が抱え込むこの緊張は、「過渡期にお

このような、コミンテルン三二年テーゼ以来 代をわたくしたちは所有してゐなかつたのだ、わたくしたちを取 年の評論では、「戦後、近代の確立がもとめられた原因」を 代の頽廃が分かちがたく混淆するこの精神的風土、 巻いてゐるものは封建的なものであり、或ひはそれよりもまだ旧 ける後進国の知識人」であることの「覚悟」に発する。 でこそ、荒の文学は現出したと説く。 味する)とがひとつの魂の中に共棲するこの政治的季節」 いものであり、総括して前近代的なものである」と述べていた。 した荒は、「近代市民社会の未成熟に思いあたつたのであつた。 血の拒否から発する)と革命への決意 お馴染みの現状認識を共有する日野は、 (流 血の條件附同意を意 「前近代の残滓と近 あるいは講座派以 平和への希い 一九四九 のなか 問 13 沂 直

り、

までも固執する。 『現代評論』創刊号(54・6)の日野による巻頭 文学』54・5)ではおよそオプティミスティックにも、「文壇は、 ことについては、別のところで確認した。荒は「文壇論」(『近代 市民社会の先駆的な実現形態を「文壇」に見出す言説を提起した 代前半のいわゆる国民文学論争に際し、荒が自由にして合理的 ならざる実として肯定的に語りはじめていたからである。五○年 後して、 を過剰に投影していると言わざるをえない。朝鮮戦争の時代に前 で、最も近代化された部分になることができる」と語った。 市民社会の代用品としての機能をはたす。前近代的な社会のなか を荒正人に見出すとき、日野は荒の批評にみずからのペシミズム だが、 対して日野は、 荒はみずからの批評的立場を「市民文学論」として、 後進国知識人の困難な立場を「虚点」と呼び、 後進国知識人の依って立つべき「虚点」にあく その範 虚

牲によって復活したこの国の独占資本は再びその露骨な収奪の道 年の日野の認識であった。「今や戦後という近代化の蜜月時代は終 取りかえしがなく失われてしまっていた」というのが、 敗戦という高価な代償を支払って与えられた絶好の革命の機会は ミンフォルムの批判によってやっとバラ色の夢から醒めたとき することが喫緊の課題であると説く。ところが、 とし、三二年テーゼ式の二段階革命ではなく両者を「同時遂行 切りはなすことができない」ところに後進国日本の特殊性があ と題されている。ここで日野は、「近代化と社会主義化とを決して 論文は、「後進国における現代の課題――マニフェストにかえて を軍事化の方向に賭けようとしている」。この評論には、かつて彼 廃墟の記憶とともに平和革命の幻想は消えた。 朝 われわれ 鮮 の動乱とコ 一 九 の犠

と」、つまり「反抗という倫理を自らに課すること」の必要性を、 が表明していた社会変革への希望はすでに失われたという認識が みずからを鼓舞するようにして説いている 色濃い。この失望感の下に、日野は「秩序と決して調和しないこ

日野啓三の批評の出発点には、朝鮮動乱を機に露呈した戦

に見舞われたらしい。日野はのちの評論集『存在の芸術』(南 をもって終刊した。同人の方向性の不一致がその主な要因だが 日野の場合、この頃から自己の批評の根拠について、深刻な懐疑 る人民戦線としての 右の一文をマニフェストとして掲げた、戦後批評第二世代によ 11)のあとがきにおいて、当時を次のように振り返る。 『現代評論』は、五四年一二月刊行の第二号 北

到

0

て人間的な次元のものでしかないのか――といった暗い疑惑 かった借り物でしかないのではないか、 しい。「現実」「人間」「言葉」など、これまで私が使ってきた では底深い疑いがガン細胞のようにひそかに増殖していたら きわめて、時代的な、仕事をつづけているうちに、 ヒューマニズムの立場から政治の非人間性を批判するという 観念は、本当に私自身のものなのか、 時代の通念によりか あるいは文学は果し 私の内部

理念たる「ヒューマニズム」は空転を余儀なくされたのである。 後復興によって日本の後進性が払拭されたとき、 まったことを明察する、 らから継承した「ヒューマニズム」が批評的な手応えを失ってし ここには、 戦後社会の変革への希望が失われるなかで、 日野の苦い認識が影を落としている。 日野の批評上の 荒正 戦

> うべき文学の自律性を説いた平野謙を、むしろ政治的なものに過 ものとして信じうる、つかのまの――おそらくは最後の―― て、 批評の立脚点とした危機意識を消し去ってしまう。文学者にとっ 需を起爆剤とした経済的復興、 本を貧しい後進国と捉える時代認識があった。ところが、 暴力革命に対する危機意識、さらにそうした危機に瀕する戦後日 度に囚われた悪しき政治主義者として論難したのだった。(近) 「政治と文学」論争を演出した奥野健男は、政治の優位性に抗 【来したのである。事実、『近代文学』の終刊を前に、戦後二度目 政治的なものに対抗する「文学の自律性」を疑われざるべき 社会の相対的な安定化は、 日野が

が、 して内的世界を措定しうる能力を「想像力」と呼び、これを文学 二世代の批評家たちの多くは、 出されたが、そうした危機が緩んだとき、それはあたかも現実か 学は流血を強いてくる政治的現実に条件づけられた虚点として見 ものと同定する発想は保持され、いっそう拡張される。かつて文 啓三の初期批評が典型的に打ち出した、文学の自律性を想像的 自由主義の勝利、あるいは戦後転向の加速である。そこでは日 朝鮮戦争のさなかに生じたのとは逆向きの屈折が生じた。文学的 の本質であるとする認識を共有している。 ら自律した全体であるかのように認識されはじめる。戦後批評第 文芸批評の場に現出したのである。 外的現実から自由な無限の全体と かくて想像力論の時代

ニズムを切断する存在論へと傾斜し、「人間的な次元」を超越する 昭和三十年代のこうした動勢のなかで、 H 1野の批評は ヒュー

こうして昭和三十年代の「政治と文学」というパラダイムには

に脱政治化の軌跡を辿った日野の言説は、 た作品 切迫した危機感はもはやない。 になろう。だがそこには、 代以降の日野は、現代都市への関心を文学上の主題に据えること 也・松原新一・饗庭孝男・渡辺広士といった批評家に引き継がれ スのひとつと見做しうる てゆく。『近代文学』終刊の翌年、日野の小説家デビュー作となっ いった。日野みずからは小説家に転じたが、その「存在論的批評 無」としての言葉のなかに文学の本質を求める論理を模索して 季刊誌 「向う側」を創刊号に掲載した雑誌である。さらに八○年 『審美』 (審美社、 日野の批評の出発点にあった時代への 65・12~73・11)周辺の、 思弁的な抽象度の上昇と引き換え 戦後転向のモデルケー 森川達

ŋ

誌

もにした大岡の言葉に触れてみよう。 も通底している。続いては、雑誌『現代文学』で日野と活動をと の批評が抱え込んだこうした屈折は、 大岡 信の詩と批評に

### 大岡信

(

大半が たざるを得なかったからである。 れをたえず他の同人たちの眼で相対化してみつめる習慣をも うに思われる。私は私の「詩」の観念を擁護する一方で、 だったことは、私にとっては少なからぬ意味をもってい 私が詩人たちだけで構成される同人詩誌「櫂」や「今日」に われて参加するのは、大学を出て二、三年してからのこと 最初「現代文学」のような、金〔太中〕と私を除いては 小説、 評論、戯曲などの書き手である雑誌のメンバー 内は引用者補 たよ

のほか、竹西寛子・桂芳久・田中倫郎らと『現代叢書

続く戦後詩第二世代の台頭を告げたことで知られる。 代評論』にも参加している。これらの詩誌は、『荒地』『列島』に 新聞社に入社、 た大岡は、一年先輩の日野の背中を追うようにして五三年に読売 右は、 一節である。一九五 『今日』(全一〇冊、 茨木のり子・川崎洋・谷川俊太郎らの詩誌 大岡信の詩論的自伝 翌五四年には飯島耕一・平林敏彦・辻井喬らの詩 一年、 書肆ユリイカ、 日野啓三らと『現代文学』を創刊し 『詩への架橋』 54·6~58·12)に加 (岩波新書、 『櫂』や前述の 6 現

距離を置き、 像力研究会」を組織、 における村松剛の加入拒否問題を経て、 受容され、いわば和様化したことの帰結であろう。なお、 る。シュルレアリスムが「政治と文学」という戦後文学的枠組で印)を断ち切る傾向に与したことは、つとに指摘されるところであ が本来のシュルレアリスムが持つ社会、 リスム研究会」を開催し、 東野芳明のほか、 大岡は『現代評論』でも飯島と共に名を連ねた村松剛・菅野昭正 事をも視野に入れつつ議論を進めていこう。一九五六年からは 人・飯島耕一と専ら活動を共にしている。ここからは、 の主なメンバー 70・4) に集う。 57・2)、『みづゑ』(57・6~8・7) に連載した。この研究会 大岡は『現代文学』の終刊後、大学時代からの知己であ シュルレアリスムが「政治と文学」という戦後文学的枠組 かつて『現代文学』で活動をともにした神山 (大岡・飯島・村松・東野)は、「記録芸術の会 江原順・針生一郎・清岡卓行らと「シュルレア 他方、 佐伯彰一編集の『批評』 その報告と討論を『美術批評』(56・6 日野啓三は旧 日沼倫太郎らとともに 歴史あるいは政治との関 『現代評論』 (現代社他、 の面 研究会 った詩

四号(52・5)に掲載された詩作品「一九五一年降誕祭前後」を たようである。大岡も日野啓三と同じく、朝鮮戦争という「流血 眼したのは、『現代文学』に参加した経験に負うところが大きかっ 後年の回想から窺われるように、 の時代への強い危機感を共有していた。そのことは、 、書肆ユリイカ、 ここで改めて確認したいのは、大岡信の出発期についてである。 58 8 60 2 彼が青年時代に批評家として開 を刊行してい 『現代文学』

明らかであろう。

れる/ どよもしのそよぐ原始の/そのタムタムの……告発せよ/服 海を越えた彼方の丘に/旗は落ちる ユマニテの微笑はちぢ みの眼を泥の中に瞑らせるため とく/ 列する/日本列島……// 悲しめ/ の焦げた空間//落ちた太陽を踏んで/かなたに酷薄な夜を がらえて輝いているか/みよ 十円札の皺のような心の皺と めに/どのような春が どのような夢が/荒野の涯に生きな 、証明する今?//紙上に撒かれた鉄の粒子/黒い磁場に整 、飛び散った肉が焼杭にはりついている/冬の空 織する者は誰か/おお 敵だけがおれたちの不幸な生身を れたちの青春は雨にうたれている//言え おれたちのた っている街はずれまで/黒塗りの静かな椅子の葬列……/ に濡れた椅子から垂れさがる //注げ /耳の回路をめぐってくる軍靴の遠鳴り や陶酔を夢みはじめる 注げ 沖の深みへ /扁平な耳を//雨にうたれ /おれたちの世紀のゴルゴダ 死/公園のこちらの隅から 夜の河よ/五百万の悲し 悲しむならば岩のご / その低音の おれたち

> ならぬ/みよ る黒塗りの青春/死を分泌しそれによって肥ってゆくおれ れている茸のむれ/おびただしい流血に/地の塩は /腐敗はすでに純潔の影の部分/その人知れぬ成熟にほ 灰色の曙に /陰湿の地にふるえる影をおとし おれ

たちにはもう/過剰である

ると端的に解釈している。(18) よって肥ってゆくおれたち」は朝鮮戦争による特需景気を意味す 路をめぐってくる軍靴の遠鳴り」は再軍備を、「死を分泌しそれ 状況」を「解読可能な符牒にすぎない」ものであるとし、 という意識である。三浦雅士は、この詩に表現された「政治的 身が忍び寄る「死」を糧としながら肥え太り「腐敗」しつつあ 織者」が告発されている。彼らから「青春」の輝きを奪うのは 塗り潰され、 ここでは、詩の主格である「おれたち」の生は、「雨」「黒塗り された際、この詩には 「海を越えた彼方」で「おびただしい流血」が繰り返され、彼ら自 反戦詩あるいは抵抗詩としての性格がいっそう浮き彫りにされた。 「夜」 「灰色」 「陰湿」 「影」といった暗いイメージの連鎖によって のちに第一 輝かしい「春」や「夢」を奪い去る「酷薄な夜の組 詩集 『記憶と現在』 「朝鮮戦争の時代」という副題が付され (書肆ユリイカ、56・7) に収録

詩化されたわけではないところに、 う一過的な倫理によって否定されるだけで、反戦の原理じたいが 識の高音部を形成している」と指摘しつつ、「朝鮮戦争が青春とい 限界もまた露呈された」と批判する。だが、「反戦の原理 郷原宏は本作について、「詩集『記憶と現在』のなかでも現 大岡とその世代がもつ想像力 」の詩

の産物だったのではないか。

「一九五一年降誕祭前後」は、その葛藤を強いたと考えられる。「一九五一年降誕祭前後」は、その葛藤を強いたと考えられる。「一九五一年降誕祭前後」はむしろ、政られまい。同世代の日野を筆頭とした『現代文学』はむしろ、政られまい。同世代の日野を筆頭とした『現代文学』はむしろ、政られまい。同世代の日野を筆頭とした『現代文学』はむしろ、政られまい。同世代の日野を筆頭とした『現代文学』はむしる帰せいに失敗したことは、大岡の属する世代の問題には必ずしも帰せ

語を書き込んでいた。以下、その聯を見ておこう。語を書き込んでいた。以下、その聯を見ておこう。 にはオノマトペのような「タムタム」という打楽器の名が連想らにはオノマトペのような「タムタム」という語が呼び出され、さされる。なお実のところ、この「タムタム」という語解の一種の名を詩句に用いたのは、大岡信の専売特許ではない。すでに前年、名を詩句に用いたのは、大岡信の専売特許ではない。すでに前年、名を詩句に用いたのは、大岡信の専売特許ではない。すでに前年、高を書き込んでいた。以下、その聯を見ておこう。

(傍点は原文)/野蛮人のタムタムの音よ。(傍点は原文)/ちむ者たちよ/海を越えまたもひびいてくる/あの商人=よ》/そして蛇の火を吹く舌端よ/舌端を切断しようとた由よ》/禁断の果実と/ギラギラ蛇のようにうねりながら、

弧れ出すこともなかつたので、/血は空に/他人のようにめぐつ飯島の初期代表作「他人の空」(『詩行動』53・10)には「もう

ている。」という三行が読まれる。この詩をはじめとして、第一詩九五三年当時になお生きながらえていた戦争の幻影」を主題とするという解釈が根強い。しかし当時の飯島作品が、あの戦争よりるという解釈が根強い。しかし当時の飯島作品が、あの戦争よりも朝鮮戦争下の同時代的な危機意識を表出していることを見落とも朝鮮戦争下の同時代的な危機意識を表出していることを見落とも朝鮮戦争下の同時代的な危機意識を表出していることを見落とも朝鮮戦争下の同時代的な危機意識を表出している。右この作品もまた、朝鮮戦争の時代状況を色濃く反映している。右に引いた一聯では、スクラムを組み「自由」を叫ぶ者らの声が封じられることへの危機感が基音であるとすれば、海の向うから響じられることへの危機感が基音であるとすれば、海の向うから響いてくるタムタムの「野蛮」な音はいわばその倍音をなして、第一詩本の彼方に感受し、それを「タムタム」の音に象徴させるという海の彼方に感受し、それを「タムタム」の音に象徴させるという方の飯島作品の発想が流れ込んでいると見てよい。

次のように述べている。 大岡信は『他人の空』の時代の飯島耕一をよく知る者として、

になることができず、そのことに罪悪感めいたものを感じてたなることができず、そのことに罪悪感めいたものを感じてた。顕島の、たとえば「他人の空」という詩は、そういう時た。飯島の、たとえば「他人の空」という詩は、そういう時た。飯島の、たとえば「他人の空」という詩は、そういう時た。飯島の、たとえば「他人の空」という詩は、そういう時になることができず、そのことに罪悪感めいたものを感じての最期鮮戦争とレッド・パージはぼくらの学生時代を通じての最朝鮮戦争とレッド・パージはぼくらの学生時代を通じての最朝鮮戦争とレッド・パージはぼくらの学生時代を通じての最

だ。陶酔することの禁止は、 平な耳」が「陶酔を夢みはじめる」ことをみずからに禁止するの とも音韻の上で隣接している。作品はこのように、連鎖するイメー を縛っているのである。 戯のための素材としてはならないという禁忌感によってみずから 理意識に由来する。つまりこの詩は、 ジと音の響きの愉しみに明らかに魅惑されている。しかし同時に、 を繋ぐ「その」という指示語と頭韻を踏み、直前の「どよもし」 よりも、 身のものでもあったはずである。大岡作品の「耳の回路を」以下 の聯に戻ろう。詩行の運びは反戦や抵抗のメッセージを打ち出す 「おれたち」はそうした言葉の愉しみに身を委ねようとはぜず、「扁 ここで大岡が飯島に見た「罪悪感」は、 むしろ言葉遊びに傾いている。「そよぐ」という語は、 詩が主題とする朝鮮戦争の時代の倫 戦争の流血を詩の言葉の遊 おそらくは当時の彼自

空、

### 5

うした姿勢は、当時の大岡の詩論からも跡付けられよう。大岡の 性を擁護する姿勢を強めていった。 との「陶酔」を、社会的な倫理性よりも自己の詩人としての感受 批評家としての出世作となったのは、「エリュアール」(『赤門文 降誕祭前後」とほぼ同時期に公にされた初期代表作「春のために\_ (『東大文学集団』52・?) にすでにその兆しが認められるが、 しかし大岡信は、 52・11→改題「エリュアール論」、『詩人の設計図』 言葉で遊ぶことの禁忌よりもそれを愉しむこ 詩作に照らせば、「一九五一年 書肆ユリ

> イカ、 れは詩論としても、 を論じた評論である。 のに思はれる」と、この学生批評家の出現を歓迎した。 レアリストにしてレジスタンスの闘士として知られるこの詩人 58 5 である。ポール・エリュアールの死の直 エリュアール論としても、ぼくには出色のも 中村真一郎は『文学界』の同人雑誌評で「こ 前

大岡は論じている。 アールの社会的関心に伴つて、はじめて起ったものでもない」と 肉体にある」と書いている。さらに、作品に歌われた「愛」に すのだ。錯乱の根は、依然としてエリュアールという確固とした を借りつつ自然をいわば体内化することで歌う詩人の肉体を論じ、 面に輝いている数多の言葉が、あのようにも豊富な錯乱を生みだ 「彼は彼自身の宇宙を様々に切断してみせるだけだ。その時その断 て、「スペイン内乱前後から著しくその色彩を強めてくるエリュ 大岡はここで、「一驚に値する程単純な、要素的な自然、 海、大地、野、水、火、風、花、果実、木の葉等々」の言葉

新書、 合も、 ず、「そして空はお前の唇の上にある」という一行を書いたシュル 対して大岡にとって、 的詩人として位置づけていた。のちに大岡と接近した安東次男の 挑んだ詩人」と評し、ルイ・アラゴンと並ぶレジスタンスの代表 詩的表現力と活動力との一切をあげて、もっともはげしい戦 例外に属していよう。たとえば、 『抵抗詩論――詩の創作と実践のために』(青木文庫、53・9)の場 このようなエリュアール解釈は、同時代の評価枠組からす そのエリュアール理解は概ね同様の枠組に収まってい 51・3)において、エリュアールを「ナチスに対し、 エリュアールとは抵抗詩人であるよりもま 加藤周一は『抵抗の文学』 h

間の肉声の魅力」を見つめ直すことにあった。 たされるようになる」傾向に抗い、詩における「存在としての人 レアリスム詩人であった。 の詩が「形而上的、或は社会的考察の対象として詩的価値をも 大岡の「エリュアー ル の眼目は、 今

実際、 うな夢が/荒野の涯に生きながらえて輝いているか」という詠嘆 転する金の太陽」が和やかに照り映えている。 詩の中で手応えのあるものとして語ることのできた詩人である。 があったが、大岡自身は「春」と「夢」を生きた詩人、それらを 前後」の世界を覆っていた暗い影は払拭され、「しぶきをあげて廻 の光景から歌い出される。この詩の世界では、「一九五一年降誕祭 先の「一九五一年降誕祭前後」には、「どのような春が 同時期に書かれた「春のために」は、「砂浜にまどろむ春」 どの

11

周知のとおり、このことを批判したのが大岡信らと同じく五

ともかくもまず拠るべきものとして、彼らの内部に育てられはじ きない領域に、すでにはみでてしまっている自己を自覚した青年 いて、 が、自らのうちに輝いている空や土や太陽に接近しようとすると を塗り替え、「感受性の祝祭の時代」と規定した。「歴史主義の網 よそ頼りなげな一語によって表象される人間のナイーヴな能力が たのは、《言葉》の世界であった」と大岡は記している。一彼らに き、彼らのうちに突如尨大な海のごとき拡がりをもって自覚され の目によっても、政治主義の網の目によっても掬いとることので 後年、現代詩史を論じた『蕩児の家系』(思潮社、 大岡は、詩の領域をみずから牽引した一九五〇年代の意味 信じるに値するものは、 何があったか。感受性 のちに見る金太中の詩には 69・4) にお 一このお

0)

0

空」一土」「太陽」

「海」といった「要素的な自然」が頻出する)。

(事実、

大岡や飯島耕

代の優越を主張したと言ってもよい。

最後に、『現代文学』で日野啓三や大岡信と活動をともにしたも

象しようとする志向と表裏一体でもあろう。 代経験を忘却しようとする志向、 が詩の基盤であるとする認識である。だがそれは、 的な歴史や政治よりも、詩人の肉体に根を下ろした「言葉」こそ 受性の祝祭の時代」と定位した大岡が前景に押し出すのは、 代文学』を介して触れた批評的立場であった。 強調するが、それらはまさしく朝鮮戦争の時代にみずからが こうして大岡は「歴史主義」あるいは「政治主義」への違和 詩の領域から歴史性政治性を捨 詩の五〇年代を「感 朝鮮戦争の時 現実 現

わち、 のの、そのボールで与重の本会自男集とのかかわりあいが、内的な格闘や葛藤として詩に表現されない」ところに見出している。すないので、「「「「「「」」であった。「「」」である。 どこかいかがわしいものに見えていた。あるいは吉本は大岡らの 詩意識の安定が、戦後社会のまやかしの安定と対応するような、 序意識を、 分化の過程でみずからは、安泰であると錯覚している階級の、 のうえに詩意識の基礎をすえ、もうれつなはやさですすむ、 表される世代― 年の『現代評論』に加わった、しかし前世代の『荒地』派と近 感受性 眼には、 吉本隆明である。吉本は、大岡や飯島耕一、谷川俊太郎らに代 「実存的な関心」と「社会的な関心」の欠如を批判した。吉本 彼らが朝鮮戦争以後の「日本資本制の、ごまかしの安定感 」をいかがわしいものとすることによって、みずからの世 戦後転向と相即した大岡信ら当時二十代の詩 詩意識のなかへくりこんでいる」と吉本は指摘し、そ -吉本のいわゆる「第三期」の詩人たち―― 人たちの -の特徴 秩

を当てる言葉として読まれうる。 を当てる言葉として読まれうる。 を当てる言葉として読まれた金太中の詩は、彼らの死角に光本の時寒感から批評と詩を書き起したとすれば、「在日」というの同人たちが、大岡のいわゆる「黒い磁場に整列する/日本列島」の一人の詩人・金太中の詩作品に目を向けたい。『現代文学』の他

# 6 詩の活字を脅かしているもの──金太中

大学に入学した年、高校時代からの友人に「君は詩をやるそうだが、ぼくの友人にも詩人がいる」、とある男を紹介されました。現在、文芸評論家として活動している栗田勇です。 東田を通じ、シュールレアリスムに造けいが深い詩人で詩論、栗田を通じ、シュールレアリスムに造けいが深い詩人で詩論、栗田を通じ、シュールレアリスムに造けいが深い詩人で詩論、栗田を通じ、シュールレアリスムに造けいが深い詩人で詩論、東田を通じ、シュールレアリスムに造けいが深い詩人で詩論、東田を通じ、シュールレアリスムに造けいが深い詩人で詩論、東田を通じ、シュールレアリスムに造けいが深い詩人で詩論、東田を通じ、シュールレアリスムに「君は詩をやるく文学全般の同人でした。「カイエ」の仲間がどちらかというと表が、ぼくの友人に「君は詩をやるくずかだったのに対し、現代文学グループは酒を飲むこともと奔放だったの方により、といる人に「君は詩をやるくうだが、ぼくの友人に「君は詩をやるくうだが、ぼくの友人に「君は詩をやるくうだが、ぼくの友人にいるが、はいる人にいるないる。

同門の飯島耕一・栗田勇・工藤幸雄・村松剛、美学科の東野芳明一九五〇年に東大に入学した。仏文科で渡辺一夫らに学ぶ傍ら、ある。この回想録によれば、いわゆる「在日二世」として神奈川ある。この回想録によれば、いわゆる「在日二世」として神奈川ある。な大中は、まもなく北海道室蘭に渡り、旧制一高を経てに生れた金太中は、まもなく北海道室蘭に渡り、旧制一高を経てたまれた。金太中(金本太中)「私のなかの歴史――室蘭発全国行き・石は、金太中(金本法はより)「私のなかの歴史――室蘭発全国行き・石は、金太中(金本法はより)

飯島は後年回想している。 飯島は後年回想している。 飯島は後年回想している。 飯島は後年回想している。

全文は以下である。 街』(書肆ユリイカ、54・7)を刊行した。本書の「あとがき」の金太中は五四年春に大学を卒業してまもなく、詩集『囚われの

たいしては、とうの昔にぬぎすてた僕の古い帽子を進ぜよう。を知れぬが――もし、そうだつたとしたら、もう、これ以上、こんな詩を書く必要はないだろう――この詩集を、僕を敵としてい人たち、とりわけまだみぬ祖国の幼い子供たちに捧げる。ない人たち、とりわけまだみぬ祖国の幼い子供たちに捧げる。ない人たち、とりわけまだみぬ祖国の幼い子供たちに捧げる。不幸にして、ここに集められた詩は、単に、僕の個人的な不幸にして、ここに集められた詩は、単に、僕の個人的な

と読んだ工藤は、「民族の(したがつてまた人間の)敵にたいしてにいう「詩の活字を脅かしているもの」を「平和を脅やかすもの」れた。執筆者はかつての『カイエ』の同人・工藤幸雄である。右本書は刊行直後、『近代文学』(54・8)の書評欄で取り上げら

意と苦しい行動とをとおして実現されるであろう」と工藤は書く。には、まさしく希望がなければならない。その希望は戦いへの決するところに『囚われの街』の主題を見出す。「拒否の延長の向う憎悪と怒りをなげつけ、殺戮者の強要するすべてのものを拒否」

数えられる企業に成長させている。

大学に就任、同社の全国展開に成功し、今日でも業界最大手に兄とともに建設機器レンタル会社「カナモト」を起業した。のち教職の経験を経て、父の死を機に地元室蘭に帰郷した金太中は、別とともに建設機器レンが、詩集の刊行には至らない。出版社勤務やに詩作品を掲載したが、詩集の刊行には至らない。出版社勤務やに詩作品を掲載したが、詩集の刊行には至らない。出版社勤務やに持に対している。

た詩篇「おとづれに」を読んでみよう。 詩を掲載したのは、終刊第五号(52・7)のみである。掲載され改めて朝鮮戦争の時代に立ち戻ろう。金太中が『現代文学』に

片手は かつて うとする!//ぼくらは蒼ざめ の片手を//おお 紋に いたずらに小石をけとばし/とりのこされた ぼくら しにすがり/祈るように片手をふりあげていた/ひろがる波 いつた 兵士たちのうたを//ぼくらは ねむれ/ ねむるなら 獣のごとく……//まひる ぼく 嘆いていた/曠野にとどろく 蹄のおと/とおく 目ざめる/まどろみのなかから匐いあがつてきた/巨 いつの日に/ふたたび ぼくらの太陽は とざされ/あかるくみだれた空は 五本の指をひらいて/ぼくらの記憶を 海 霧にかくれる海峡よ/島々に渡つた /樹木をゆする/赤むけたこ 戻つてくるというのか// 夥しいテープのは 奪い取ろ 消えて

ぶしで/はげしく はげしく/残忍な夜の訪れに むかつて

島」の内部に閉ざされている。

島」の内部に閉ざされている。

しかし、それら一人称複数形により
「おれたち」とよく似ている。しかし、それら一人称複数形により
「おれたち」とよく似ている。しかし、それら一人称複数形により
「おれたち」とよく似ている。しかし、それら一人称複数形により
「おれたち」とよく似ている。しかし、それら一人称複数形により
において、海」によって隔てられたこちら側、すなわち「日本列
において、海」によって隔てられたこちら側、すなわち「日本列
に対している。

とともにしかありえない。「ぼくら」を「まひる」の目覚めへと連がほとんど取り返しのつかないまでに決定づけたこの離散の痛みに「島々」に離散してしまっている。彼らの共同性は、朝鮮戦争対して金太中作品の場合、「ぼくら」の失われた「片手」はすで

う。さらに言えば、この作品は、大岡作品が不定の「誰か」とし あったはずである。だが彼らはそれによく応じることができただ 書き込みはまた、金太中の周辺にいた詩人たちへの呼びかけでも こうして戦争を組織する破壊者のイメージと、それに対して蒼ざ てしか捉えることのできなかった「酷薄な夜を組織する者」を明 れ出すものとは、何よりも故国を喪失したことのこの痛みであろ アスポラの経験が刻印されている。この一人称複数形の代名詞の は、植民地時代から朝鮮戦争の時代へと到る、在日としてのディ るところに、大岡作品にはない金太中作品の特徴が認められる。 めつつ「はげしく」はげしく」抵抗する「ぼくら」が形象化され るみに出し、その「巨大な腕」と「五本の指」を可視化している。 金太中が「おとづれに」に導入した主格としての「ぼくら」に

### 7 もう海を夢みることすらできな

う献辞が付されている。以下がその最初の聯である。 (「空と汗」より改題、『詩行動』53・9)には、「金太中に」とい ·鳥耕一の詩集『他人の空』に収められた作品「埃まみれの空

は、

汗ばんで馬腹のようにあえいでいる。 久しいことだ。そこ此処のやけた路上にむきだしの 空、呪われた空、人々が破壊にのみ執した空を。それはもう まみれの絨毯の空、 私は幾枚もの空を所有している。涙ぐんだ空、なかでも埃 可哀そうな空、おびただしい血の乾かぬ 不幸は

> して自在に一所有」しうる。飯島のいわゆる一シュルレアリスム」 どこかうわの空であるからこそ、それを現実ではなくイメージと フに接した「私」は、岩田宏が「放心の姿勢」と呼んだように、 が、「可哀そうな」という語であることが見逃せない。カタストロ る。右の詩について言えば、「空」に充てられた修飾句のひとつ それ自体は、金太中の詩の世界とは異なって、どこか他人事であ に見出しているが、世界の破砕というイメージをもたらす「惨事 和をとおして肉化される「世界」のイメージと、その両者の複合 格」を、「惨事に洗われた「世界」に対する異和の感情と、その異 けられる。平出隆は、『他人の空』に表された飯島の「詩法の骨 此処の焼けた路上」すなわち戦後日本の廃墟のイメージと結び付 としてではなく「もう久しいこと」としていわば稀釈され、「そこ もたらした流血と破壊の経験は、現在まさに生じつつある出来事 ドのようなものとして感受している。そのような「空」の破砕を 形象を、むしろ複数に破砕された、自在にシャッフルできるカー この詩の「私」は、「空」という単一の普遍性の象徴となるべき 破局的な現実に対するこの隔たりの感覚と一体である。

とはない」。このように流血への危機感と無力感が飯島の詩作を動 ならぬものかとは考えるが、 0 れに棹さして行こうとする詩人」のひとりに数える。すなわち「目 に足を踏み入れようとせず、人間の誠実さを通してのみ現実の流 すことは文学の放棄であると考えながら、而も進んで社会的状況 書評を寄せた。金太中はここで、飯島を「社会的状況から逃げ出 前に流れている赤い血をみて、これは大へんな事だ、どうにか 金太中は『今日』創刊号(54・6)に『他人の空』につい 彼自身、 赤い血の流れを阻止するこ ての

う」と述べている。

う」と述べている。

を対して、意図的に書くべきではないかと思いないいてきたが、果たしてこれでよいものか」と問いかけ、「はいけていることを示唆した金太中は、「彼は現実との距りの中で機づけていることを示唆した金太中は、「彼は現実との距りの中で

いう献辞が付された作品である。と題された一篇の後半三聯に目を向けてみよう。「飯島耕一に」とと題された一篇の後半三聯に目を向けてみよう。「飯島耕一に」と金太中『囚われの街』所収作のうち、「奇妙な風景」(初出未詳)

の太陽に包まれていた海辺にも/なまりいろの雲が垂れさがの太陽に包まれていた海辺にも/なまりいろの雲が垂れさがり/沖合いは すでに 灰色に沈みはじめたので……//ぼていらい/ぎつしりとつまつていたぼくらのポケツトはすでていらい/ぎつしりとつまつていたぼくらのポケツトはすででも きみたちは夢みようと云うのか/唇を失つた女と 鼻をもぎとられた男の/皮のすりむけるような いたいたしい ちもぎとられた男の/皮のすりむけるような いたいたしい なもぎとられた男の/皮のすりむけるような いたいたしい なもぎとられた男の/皮のすりむけるような いたいたしい

〈ほく〉は、「ぼくら」のなかで孤立している。ここでは複数形のおい。「それでも きみたちは夢みようと云うのか」と問いかけるような「夢」を見ることができないという断念と喪失感は、このような「夢」を見ることができないという断念と喪失感は、このい。「それでも きみたちは夢みようと云うのか」と問いかけるとい。「きみたち」が夢見るとはありえない。危機は終わることがなく、「きみたち」が夢見るとい。「それでも きみたちは夢みようと云うのか」と問いかける

「ぼくら」は、むしろ詩の主格たる書かれざる〈ぼく〉の孤立をこれであり、それが祖国喪失者の共通感情であるとすれば、右の詩な悲しみ」、それが祖国喪失者の共通感情であるとすれば、右の詩な悲しみ」、それが祖国喪失者の共通感情であるとすれば、右の詩な悲しみ」、それが祖国喪失者の共通感情であるとすれば、右の詩な悲しみ」、それが祖国喪失者の共通感情であるとすれば、右の詩な悲しみ」、それが祖国喪失者の共通感情であるとすれば、右の詩な悲しみ」、それが祖国喪失者の共通感情であるとすれば、右の詩な悲しみ」、それが祖国喪失者の共通感情であるとすれば、右の詩な悲しみ」、それが祖国喪失者の共通感情であるとすれば、右の詩が吐露しているのも、これであろう。この感情が、「きみたち」の孤立をことましているのも、厚い雲に覆われた現実を直視ように多彩な夢を見ることよりも、厚い雲に覆われた現実を直視することに〈ぼく〉を向かわせるのである。

に中華人民共和国が成立し、その年の夏に朝鮮戦争がおこった。 日本の革命も、多くの人にとって不可避と信じられていた」と書いている。「十年後の天下泰平を当時予想したものは、おそらくいいている。「十年後の天下泰平を当時予想したものは、おそらくいいま義の時代を終焉させ、迫り来る流血の危機を後進国としていかに乗り越えるかという問いに同時代の知識青年たちを直面させた。もはや「政治の優位性」は疑いえず、「文学の自律性」は虚構=虚もはや「政治の優位性」は疑いえず、「文学の自律性」は虚構=虚もはや「政治の優位性」は疑いえず、「文学の自律性」は虚構=虚もはや「政治の優位性」は疑いえず、「文学の自律性」は虚構=虚している。が表述と文学」という、そもそもは文学を防衛するために設定された戦後批評の枠組に最初の屈折が生じたことを示している。

しかし、朝鮮戦争がもたらした経済的復興と独占資本主義の勝

竹内好は、安保闘争前夜に著した一文のなかで一九五〇年当時

露呈した社会変革の挫折、すなわち戦後転向は、いわばこの「文与した。それは、日本社会の後進性を前提とする批評の根拠が切り崩されたことを意味する。かつて社会変革の理想を抱いた戦後世代の文学者の多くは、五〇年代を「感受性の祝祭の時代」と規世代の文学者の多くは、五〇年代を「感受性の祝祭の時代」と規度した大岡信が語るように、政治的社会的関心よりも自己の感受定した大岡信が語るように、政治的社会的関心よりも自己の感受定した社会のでは、日本社会の後進性を前提とする批評の根拠が切り崩された。

社、05・4)を公にするのを待たねばならなかったのである。 には、およそ半世紀後に詩集『わがふるさとは 湖南の地』(思潮には、およそ半世紀後に詩集『わがふるさとは 湖南の地』(思潮には、およそ半世紀後に詩集『わがふるさとは 湖南の地』(思われる。だが、金太中は一九五〇年代後半からは詩壇より撤退思われる。だが、金太中は一九五〇年代後半からは詩壇より撤退思われる。だが、金太中は一九五〇年代後半からは詩壇より撤退思われる。だが、金太中は一九五〇年代後半からは詩壇より撤退した。 (思考と表記を書き込んだ解消したが、金太中は一九五〇年代後半からは書き込んだ解消した。) は、これである。 (思考と表記を書き、また、これである。 (思考と表記を書き、また、) は、「大下泰平」の背後、戦後批評にこうして生じた反動的な屈折は、「天下泰平」の背後、大いのである。

本稿は、釜山大学校主催国際研究集会「韓国戦争のトランスナショー本稿は、釜山大学校主催国際研究集会「韓国戦争のトランスナショル大学校)に、記して感謝申し上げる。

#### 注

2

- (1) 埴谷雄高「あまりに近代文学的な」(『文学界』51・7)
- 貝) 荒正人「批評の変貌」(『赤い手帳』河出書房、49・3、二〇一
- (3) 荒正人「一九五○年・夏」(『近代文学』50・5
- (4) 荒正人「近代小説は可能か――一九五〇年の文壇回顧」(『毎日新
- (う) 売E人「覚もておきさいこと」「戏&は冬っこ、そこで料開」50・12・29)
- ている」(『朝日新聞』56・8・27)
- (6) 辻井喬・日野啓三『昭和の終焉――20世紀諸概念の崩壊と未来トレヴィル、86・9)

学の自律性」の勝利とともにある。

- (7) 一高在学中から『現代評論』の刊行までの日野の批評活動につ(7) 一高在学中から『現代評論』の刊行までの日野の批評活動につ
- 野の他に、濱田新一、中村稔、平井啓之の批評を取り上げている。(8) 加藤周一「新しき批評家」(『文学界』51・12)。加藤はここで日
- (9) 日野はここで、旧態依然たるヒューマニストの典型として竹山(9) 日野はここで、旧態依然たるヒューマニストの典型として竹山
- (10) 辻井喬・日野啓三『昭和の終焉――20世紀諸概念の崩壊と未来』
- (1) 伊藤博「堀田善衛と日野啓三――「眼の虚無」から「虚点の思いての日野の解釈を踏まえた上で、日野の発想のほうが堀田よりいての日野の解釈を踏まえた上で、日野の発想のほうが堀田よりは、「広場の孤独」につ
- (12) 日野は『文学界』が催した「一二会」という集まりを通して、

- 服部達ら同世代の批評家たちと繋がりを持った。『文学界』(52・安岡章太郎・吉行淳之介・小島信夫といった小説家や、奥野健男・
- 見られる。 二会」の面々であり、この企画が『現代評論』創刊に繋がったと純一郎、服部達、奥野健男の評論が掲載されている。いずれも「一2)には「新人評論特集」として、日野の他に、進藤純孝、佐古12)には「新人評論特集」として、日野の他に、進藤純孝、佐古12)
- (3) 荒正人「後進国の悲劇」(清水幾太郎他『文化の思索』糸書房、(3) 荒正人「後進国の悲劇」(清水幾太郎他『文化の思索』糸書房、
- 学論の系譜」(『国文論叢』20・3)参照。
  (4) 拙稿「小説家と戦後市民社会――丸谷才一『笹まくら』と市民文
- (15) 奥野健男「「政治と文学」理論の破産」(『文藝』 33・6)。一九、三年に起った「政治と文学」論争については、拙稿「国家人の六三年に起った「政治と文学」理論の破産」(『文藝』 33・6)。一九
- (16) 拙稿「想像力と戦後転向――戦後批評第二世代の文壇形成」(『文
- [感受性の世代]解読」(『現代詩手帖』 0・10)等を参照。(17) 佐々木幹郎・城戸朱理・田野倉康一「感受性の展開と持続――
- 5、一八-一九頁) 5、一八-一九頁) 三浦雅士「鑑賞」(『現代の詩人11 大岡信』中央公論社、83・
- の卵―現代詩人論』檸檬屋、73・1、一〇三頁) 郷原宏「証言する Love Song ――大岡信ノート」(『反コロンプス
- (20) 岩田宏「飯島耕一論」(岩田宏編『今日の詩人双書6 飯島耕一社、73・11、五九頁)
- (21) 大岡信「飯鳥耕一と岩田宏」(『芸術マイナス1』弘文堂、60

- (22) 中村真一郎「同人雑誌評」(『文学界』53・3)
- (23) 吉本隆明「現代詩批評の問題」(『文学』 56・12)
- (24) 吉本隆明「日本の現代詩史論をどうかくか」(『新日本文学』 54・

- (25) 『カイエ』同人の一角が『今日』に加わっていった経緯について(25) 『カイエ』同人の一角が『今日』に加わっていった経緯について(25) 『カイエ』同人の一角が『今日』に加わっていった経緯について
- (26) 飯島耕一「五〇年代の証言――「詩行動」「今日」「櫂」「鰐」」(『現(思潮社、99・1、三三四-三四二頁)を参照。
- 代詩読本 現代詩の展望――戦後詩再読』思潮社、86・11)26) 飯島耕一一五〇年代の証言――|詩行動」| 今日」|権] |鰐]」(『現
- (27) 岩田宏「飯島耕一論」前掲。岩田はここで、「放心そのものを自10、一一頁)27) 平出隆「鑑賞」(『現代の詩人10 飯島耕一』中央公論社、33・
- に、『他人の空』の特質を見て取っている。己と他者との積極的な関係を証明するための手段」とするところ
- (29) エドワード・W・サイード「故国喪失についての省察1』みすず書房、66・(29) エドワード・W・サイード「故国喪失についての省察』(大橋洋
- (『週刊読書人』60・2・15) (『週刊読書人』60・2・15)
- (31) 三島由紀夫「亀は兎に追ひつくか?――いはゆる後進国の諸問(『中央公論』56・9)。大塚久雄らの諸説を参照した、社会科題」(『中央公論』56・9)。大塚久雄らの諸説を参照した、社会科題」(『中央公論』66・9)。大塚久雄らの諸説を参照した、社会科